

72名 (13%), 境界型 400名 (70%), 正常型 98名 (17%). 肥満度と各型の割合との間に有意な相関関係はなかった. 随時血糖, HbA_{1c}, HbA_{1c} の各値又はそのくみあわせにより判定区分の型別のスクリーニングしうる基準値を設定することはいずれも困難であった.

肥満度+30%以上の肥満群と肥満度±10%以内の対照群との間で, 随時血糖, HbA_{1c}, HbA_{1c} いずれも肥満群の方が高値であったが, HbA_{1c}, HbA_{1c} 高値の割合で見ると肥満群で特に多いということはなく肥満という単独因子のみではスクリーニングの対象とするには困難と思われた.

8) Novopen システムの臨床使用例

八幡 和明・鈴木 丈吉 (長岡中央総合病院
内科)

当院での応用例は, ノボペンが3例, ノボペンIIが15例, IとIIの併用が1例, Iと従来注射器の併用が4例で計23例. 使用インスリンはR 4例, 30R 18例, Nが1例. 症例の年齢は10才~68才で, IDDMとNIDDMがほぼ同数. 視力障害者は5例. 操作は簡単で若い患者には外来導入も可能であった. インスリン治療(1回注射9例, 2回注射5例, 混合注射1例)からの変更が15例であった. ペンの注射回数はNIDDMでは1~2回, IDDMでは3回の注射を必要とするものが多かった. ペン使用前後の各々6ヶ月の平均のHbA_{1c}では, 9.74±2.20%から8.24±1.18%と有意に改善した. 適応としては頻回注射例, 混合注射例, ブリットル型糖尿病例などで, 高度視力障害例や高齢者には導入は困難であった. トラブルとしては針先からインスリン液がでないというクレームが2件あったが, 組立の際の不手際によるものであり, 組立手技の確認を繰り返し実施することが重要と考えられた.

9) 糖尿病コントロールにおける心理的要因の検討

横山 知行・津田 昌子
矢田 省吾・浜 齊 (木戸病院内科)
谷 長行 (新潟大学第一内科)

糖尿病のコントロール良好群と不良群の心理的な相違を検討することを目的に, 木戸病院糖尿病外来を1988年3月, 4月に受診した患者にEPPS心理検査を施行し, その後18カ月間のコントロールの状態をHbA_{1c}を指標にfollow-upした. 対象症例は75例(良好群35例, 不良群40例)で, 両群の性別, 年齢の背景因子に有意差はなかった.

良好群, 不良群全体の比較では“自律”と“変化”のスコアがそれぞれ5%と1%の有意差を以て不良群のほうが高かった. このことからコントロール不良群は良好群に比して同じことを続けるよりは変化を好み, 他人の言うことを素直に聞くよりは自分勝手に物事をすすめていく傾向があることがうかがえた. また, 当初コントロール良好であったものがそのまま保たれた群と, 不良群に移行した群との比較では, “親和”“他者認知”のスコアで1%の有意差を以て良好持続群が高く, “攻撃”“持続”で不良移行群が5%の有意差を以て高かった. このことからコントロール良好持続群は内省的で, 他人に対して親密でありたいと思うことからその意見立場を尊重する傾向が, また不良移行群では衝動的で他罰的であることがうかがえた.

症 例 検 討

急性増悪した糖尿病性網膜症の1例

清水マチ子 (舟江病院内科)
安藤 伸朗 (新潟大学眼科)

特 別 講 演

『糖尿病と内分泌疾患』

金沢大学第二内科教授

竹 田 亮 祐 先生